

中世後期東国における土鍋の復活と鉄の流通事情

坂井 秀弥

1. はじめに

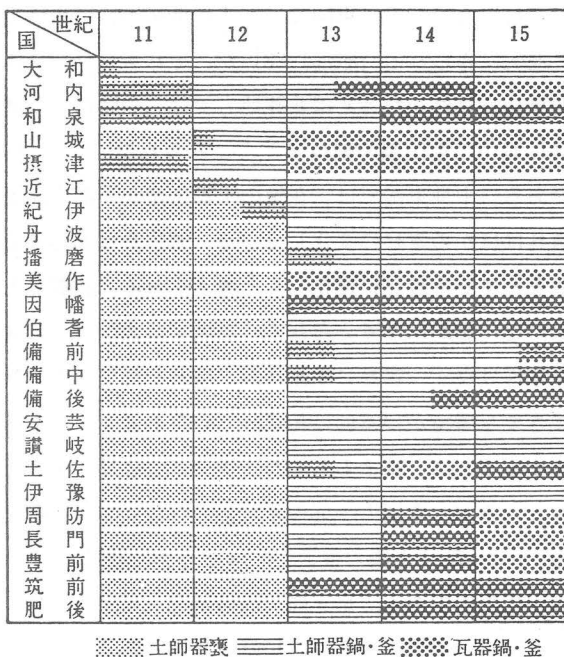
東国においては、ほぼ11世紀中葉を境にして土器から鍋・釜という煮炊具が消える。これに対して西国ではこの時期以降もほぼ中世を通して土製煮炊具が存在し、この点が両者の土器様相における決定的な相違点のひとつとなっている。土器から鍋・釜が消滅することは、ほかの素材で鍋・釜が作られたことを示す。一部の意見を除けば、鉄製の鍋・釜が土製の鍋・釜にとって変わるというのが大方の意見である。

ところで、中世の後期になると、内耳鍋に代表される土鍋が東国の一部の地域にみられる。この事実は何を意味するのだろうか。ここではこの現象を中世後期独特の鉄の生産と流通事情を反映するものと考え、思いつく点を述べることにしたい。

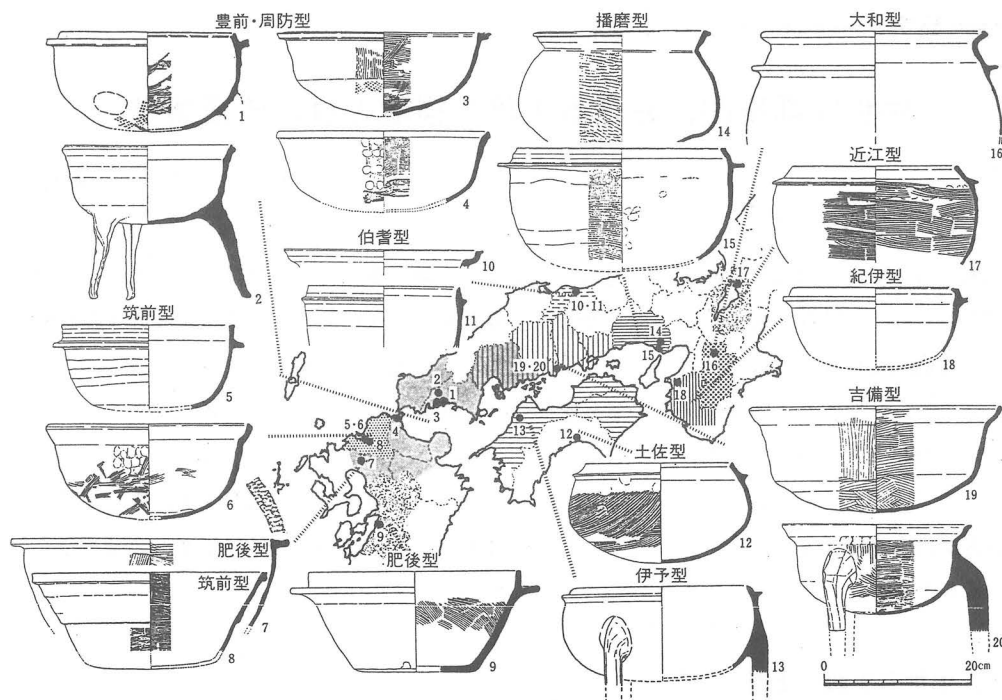
2. 中世の土鍋・土釜

中世の土製煮炊具といえば、西国とくに畿内の羽釜が代表的である。畿内では飛鳥時代から奈良時代にかけて、罏をもつ甕が出現するが、いわゆる羽釜として定着するのは古代末以降のようである。西国ではこの羽釜が中世を通じて一般的に使われ、近世初期に至る（第1・2図）。畿内社会においては、古代には土器の生産と流通の機構が完成しており、中世に至ってもこの機構が根強く維持されたと考えられる。中世の土器構成をみると、煮炊具のほかに土製の食膳具の代表である「瓦器碗」が普遍的に存在しており、畿内社会では土器生産が活発に行われていたことがわかる。古代から中世のさまざまな社会の変化をこえて、土器文化を維持しようとする畿内の保守的な意識が感じられる。その意識は土器の生産と流通に強く関与していた勢力によって形成されているようにも思われる。

ただし中世の絵巻物には鉄鍋・釜を使用している様子がしばしば描かれており、西国においても鉄製煮炊具がかなり使用されていることは確実である〔菅原1989〕。このことから西国では鉄製品があらゆる階層まで普及せず、これを使用できる階層とで



第1図 西日本における煮炊用具の変遷
〔菅原1989原図〕



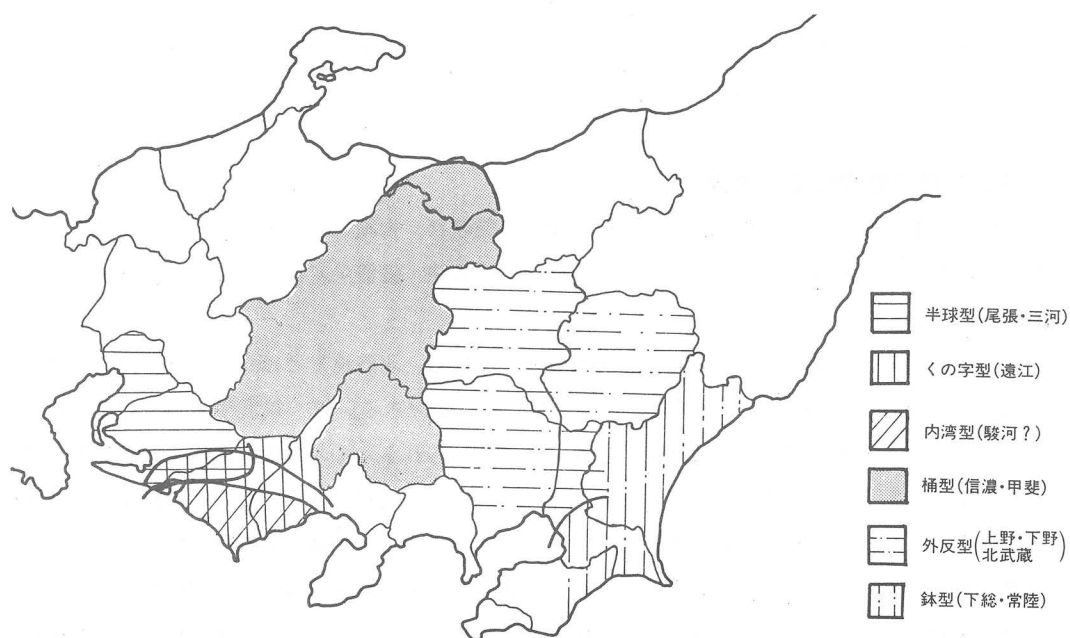
第2図 西日本における出現期の土師器鍋・釜〔菅原1989原図〕

きない階層とが存在すること、とみる意見もある。一方では鉄製と土製では使用形態、たとえば調理内容がちがうといった見方もできるかもしれない。

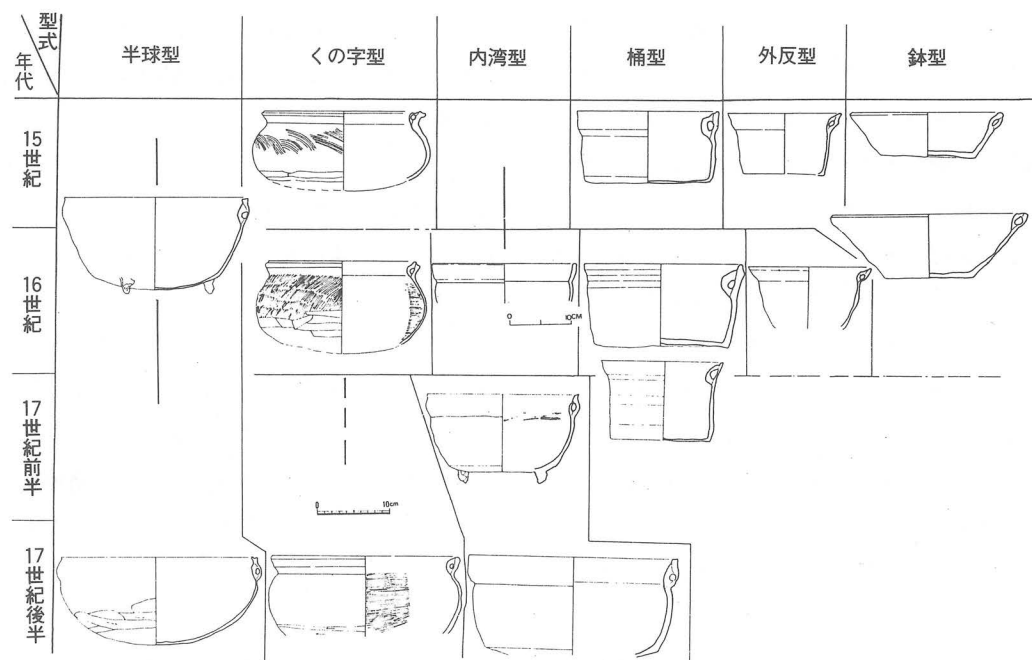
これにたいして、東国では古代10世紀頃、関東地方を中心にして甕から羽釜への変化がかなり普遍的にみられる〔服部1988〕が、それも11世紀後半以降ほとんどみられなくなる〔福田1986〕。関東地方以外、たとえば北陸地方ではこの時期まで甕が主体である。東国では煮炊具の他に食膳具においても土製の椀はほとんどみられなくなる〔浅野1987〕。この点も西国との大きな相違点である。中世東国では、在地の土器生産が一部の陶器生産だけに衰退し、日常雑器の煮炊具・食膳具はほかの素材に変化している。煮炊具はあらゆる階層まで鉄製品が普及し、食膳具は漆器を代表とする木製品に変化したと考えられる。鉄製品と土製品を比較すれば、鉄製品がより高価なものと一般的には考えられる。東国では西国とくに畿内のような、古代の土器生産と流通体制の保守性はなく、容易に生産体制が解体したことが知られる。東国と畿内とは、土器をとりまくさまざまな環境が根本的に相違していたと言えるであろう。また、東国で速やかに鉄製煮炊具に変化することは、鉄そのものが古代よりも容易に入手できる状況になったことを示す。

ところが、東国の一部の地域においては中世後期のほぼ15世紀頃から、土製の鍋が再び出現する。いわば、「土鍋の復活」とも言うべき現象がみられるのである。土鍋の形態はいわゆる内耳鍋が代表的である。足立順司氏の研究〔足立1987〕によれば、この土器の分布は北海道をのぞけば、関東・甲信・東海地方にほぼ限定できるという（第3・4図）。

それまであらゆる階層まで鉄製品が使用されていながら、この時期になって土鍋が作られるこ



第3図 内耳鍋の分布 [足立1987原図]



第4図 内耳鍋編年図(桶型、外反型、鉢型、縮尺不同) [足立1987原図]

とは説明しにくい現象といえる。吉岡康暢氏は北東日本海域の陶磁器組成の特質を列記するなかで、この点を「土製煮沸器は11世紀後半以降激減し、土鍋・土甕が13世紀代まで少量使用されるが、中世後期には石鍋と畿内産土釜が散見されるにすぎない。これを鉄鍋の民間普及地帯と確定するには、なお、関東における中世後期の土製煮沸器の復活現象、ならびに鉄器生産のあり方を整合的に説明する必要がある」と指摘している [吉岡1989 a]。吉岡氏はこの中世後期の土鍋の

復活現象を合理的に説明できない以上、東国における11世紀後半以降の土製煮炊具の激減を、鉄製品への交代とは安易に結論できないとしている。

3. 中世の鉄の生産と流通

鉄製か土製かという煮炊具における素材の違いの問題は、吉岡氏が指摘するように中世における鉄・鉄器生産と関連すると考えられる。中世における鉄・鉄器生産はどのような状況であったのであろうか。

近年、古代の鉄生産については考古学的な資料が増加し、北陸地方ではかなり具体的に解明されており〔関1989〕、東国の一地域のあり方を知ることができる。鉄・鉄器生産の工程は一般的には、(1)製錬、(2)精錬鍛冶、(3)鍛錬鍛冶・鑄鉄、に分けられる。(1)の製錬は砂鉄や鉄鉱石などの原料を木炭とともに炉で燃焼させ、鉄素材（原料鉄）を得る工程であり、(2)はその鉄素材から不要な成分をさらに取り除き、(3)は鉄製品を製作する工程である。製錬はおもに丘陵上で、鍛冶は集落で行うのが一般的である。北陸地方において鉄生産の第1段階の製錬工程が開始されるのは、ほぼ律令制の成立にともなっており、各地域ごとに生産の拠点が形成され、郡単位に近い生産と供給がおこなわれていたことが判明している。これは律令政府の基本的な手工業生産に関する理念を表わしている。すなわち、効率が悪くとも各地域ごとに生産の拠点をづくり、地域ごとの生産力を高めることをねらっていると考えられる。しかし、このような状況は律令制の弛緩・崩壊とともに変質し、各地域ごとの生産は解体する。その時期については必ずしも明確ではないが、おおくの製鉄遺跡の時期はほぼ11世紀を下限とする。

これに対し、中世の鉄の生産状況については不明な点が多い。古代の北陸地方では、丘陵上に多くの製錬遺跡が営まれていたにもかかわらず、これまでの発掘調査例では中世と確定されたものはない。^{補注}北陸地方で中世の製錬遺跡と推定されるのは能登で指摘されているくらいである。現在のところ、明確に中世の製錬遺跡の調査例はないが、その可能性をもつ遺跡はかなりあるという〔小嶋1987〕。平安後期（11世紀初め頃）に成立したとされる『新猿楽記』には「能登釜」とみえ、能登は中世に至るまで鉄器（鉄製品を製作する工程）の生産地であったと考えられる。

一方、中世遺跡で鉄滓が出土することは多い。それらの鉄滓の多くは製錬滓ではなく、精錬を含む鍛冶滓か鑄鉄に伴うものと考えられる。したがって、中世においては製錬という鉄生産の第一段階の製錬作業が、古代のように各地域で行われるのではなく、特定の地域で大規模におこなわれ、そこで得られた大量の鉄素材が広域に流通していたと推定される。

このような鉄生産のあり方は古代・中世の土器生産と類似する。古代の須恵器生産は鉄と同じように各地域で行われていたのであるが、古代末には終焉を迎え、中世には特定地域に生産地が成立し、その製品が広域に流通する。北陸においては能登の珠州焼が能登・越中以東の日本海域に広く流通する〔吉岡1989b〕。

中世では特定の地域で生産された鉄素材が広域に流通し、それが各地域で鍛冶・鑄鉄の工程を経て製品化されるものと考えられる。具体的な鉄器の生産地の例としては、新潟県出雲崎町寺前遺跡〔坂井ほか1990〕がある。この遺跡は12世紀後半から13世紀頃の集落遺跡で、一定の階層の

屋敷と推定される一画から、溶解炉・鍛冶炉の溶壁・鑄型が大量に出土しており、ここで鍛冶と鑄鉄が行われたことが知られる。鉄滓は肉眼観察によるかぎり、古代の鉄滓で言うところの製錬滓は含まれていない。今後の冶金学的な分析をへたうえでの検討を要するが、この遺跡においては砂鉄などの原料から鉄素材の生産は行われておらず、他地域から鉄素材を入手したものと考えられる。

以上のように中世の鉄生産を想定すると、中世後期の土鍋の復活は、どのように考えられるだろうか。中世後期の土鍋は形態からみても明らかに鉄鍋を模倣したものであり、鉄鍋を補うものとして存在する。中世前期に土鍋がほとんど使用されていないことは、当時の生活必需品である鉄鍋の原料になる鉄素材が、需要に応じるだけ豊富に供給されていたことを示すであろう。それが中世後期に至り、鉄鍋を補う土鍋が出現することは、当時の鉄の流通事情が中世前期と変化したことを示すのではなかろうか。

中世後期は守護領国制、あるいは大名領国制と言われる時代である。史実かどうかはともかく、「上杉謙信が武田信玄に塩を送った」というような逸話が伝えられる時代である。物資が簡単に領国をこえて流通しない状況が生れやすいことは考えられよう。当時の社会生活に重要な必需品である鉄は、このような時代には特に貴重なものになったと思われる。鉄は農工具・武器、釘などさまざまな器具、調理具の原材料である。塩と同じくなくてはならないものである。そして、製錬の作業は原料となる砂鉄・鉄鉱石の所在や、中世前期の鉄生産状況からみて、どの地域においても容易におこなえないものである。実際に鉄素材の流通が政治的に阻止されたかどうかは不明である。しかし、そのような状況が実際に起りうる社会であったことは考えられる。鉄素材の供給が制限されたとき、考えられる対応は、あらゆる鉄製品のなかでほかの素材で代用できるものについては、その方策をとることである。ほかの素材で代用できるのは煮炊きの調理具である。中世の東国において各家庭の必需品である鍋・釜を土製にすれば、かなりの鉄素材を節約することができよう。

さてこのように考えたとして、もう一つの問題が残る。東国の全域で土鍋が復活してはいないことである。東国の中世鉄生産の実態が不明なまま推定することになるが、土鍋が復活する地域は、復活しない地域よりも鉄の入手が困難な地域と考えておきたい。北陸地方では土鍋は復活しない。これは中世を通じて、能登あるいは山陰、さらには大陸からの鉄があり、北陸地方全域にこの地方の鉄素材が豊富に供給され、領国体制上、政治的にそれが阻まれることがない状況であったことと考えたい。

4. ま と め

これまで東国における中世後期の土鍋の復活について述べてきた。要点を列挙してまとめたい。

- (1) 中世においては古代とことなり、国・郡などの各地域ごとで鉄生産をおこなってはいない。ここでいう鉄生産とは砂鉄や鉄鉱石という原料から鉄素材を作る製錬である。
- (2) 土鍋は鉄鍋を補うものであり、鉄素材の需要と供給が中世後期には変化したことにより、

この時期になって土鍋が復活すると考える。その変化は守護領国制・大名領国制という政治体制のもとで、鉄素材が自由に流通しない状況になったか、あるいはそのような事態が生じる可能性が想定されることになったことに起因する。

(3) このような鉄不足という重大な事態に対処するため、鉄製品のうち鉄以外の素材でも機能できる土鍋が生産された。北陸地方などでは生産地をもつか鉄素材の流通を阻む要素がなかったと思われる。

(4) したがって中世東国の煮炊具は鉄製品が主体である。

< 参考文献 >

- 赤沼英男 1990「平安期から中世における東北北部出土鉄器」『北の鉄文化』岩手県立博物館
- 浅野晴樹 1987「関東における中世在地産土器について」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』第4号
- 足立順司 1987「内耳鍋の研究」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』2
- 小嶋芳孝 1987「能登半島の古代鉄生産序説」『考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズⅢ
- 坂井秀弥ほか 1990「寺前遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査だより』6 新潟県教育委員会
- 菅原正明 1989「西日本における瓦器生産」『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集
- 関 清 1989「北陸における鉄生産」『北陸の古代手工業生産』北陸古代手工業生産史研究会
- 田中 琢 1967「畿内と東国」『日本史研究』90 日本史研究会
- 豊田 武 1982「中世日本商業史の研究」『中世日本の商業』豊田武著作集 第2巻 吉川弘文館
- 橋本久和 1989「中世成立期の土器様相」『日本史研究』330 日本史研究会
- 服部実喜 1988「関東地方における平安時代後半期の土器様相」『神奈川考古』第24号
- 福田健司 1986「南武蔵における平安時代後期の土器群」『神奈川考古』第21号
- 吉岡康暢 1989a「北東日本海域における中世陶磁の流通」『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集
- 吉岡康暢 1989b「日本海域の土器・陶磁」中世編 六興出版

(補注)

1990年10月13日、新潟県北蒲原郡豊浦町北沢遺跡群の中世前期(12世紀末～13世紀前半)と考えられる製鉄炉3基の調査成果が現地説明会資料として公表された[川上貞雄1990]。これにより中世の鉄製錬が在地で広く行われた考えるむきも多くなろう。しかし、筆者はこの遺跡の評価について、現時点ではつぎのように考え、小稿の論旨に变りはないと考えている。

- 1) ここでは鉄製錬(精錬を含むかどうかは不明)と中世陶器生産(中世笹神窯)が密接な関係をもっていたことが、遺構のあり方から判断される。すなわち、鉄製錬にともなう木炭窯が陶器窯に転用されていること、製鉄炉と陶器窯が隣接して存在することから、同じ工人がほとんど同じ時期に鉄と陶器の生産を行ったと考えられる。
- 2) 中世笹神窯の製品は能登の珠洲焼のように広く流通するのではなく、越後北部の阿賀北地方にはば限定して流通している。したがってここで生産された鉄も陶器と同様に狭い範囲に供給されたもので、越後の広い地域に流通していた鉄素材は在地産とは考えられない。
- 3) この製鉄遺跡は丘陵地帯に立地し、古代の製鉄遺跡の分布と重なる。このことは中世の鉄製

鍊も基本的には古代と同様な立地条件のもとで行われていたことを示す。したがって、中世の鉄製鍊が平地など古代と立地条件が変化することから、遺構の認識が難しく、実態がよく分からないとは言えず、在地で行われなくなったからこそ遺構が見つからないと考えるほうが自然である。

(1990. 10. 28)

(追記) 小稿作成にあたっては赤沼英男・穴沢義功・足立順司・宇野隆夫・荻野繁治・兼康保明・川上貞雄・吉岡康暢の各氏から有益な御教示をいただいた。記して謝したい。